おちほ

第86号　平成28年11月15日　発行　社会福祉法人　椎の木会　落穂寮　発行者　太田正則
TEL 0748－77－2299　FAX 0748－77－5588　http://ochiho.noor.jp/

地蔵盆

今年も毎年恒例の地蔵盆の季節がやって参りました。

いつもグラウンドから落穂寮を眺め、見守っていてくださるお地蔵様。昨年、しっかり皆さんがお参りしてくださったお陰で今日まで一年間利用者さん、職員とも大病なく無事過ごすことができました。ありがとうございます。

今日のお地蔵様はお色直しをされ、とても綺麗。そのお地蔵様にみんなで手を合わせて一年の感謝を込めてお参りをしました。お天気にも恵まれ、利用者さん一人一人今年も無病息災で過ごせるようお地蔵様にお祈りされました。中には、利用者さん自らお地蔵様の前へ行き、手を合わせられる様子も見受けられました。皆さん今年もしっかりお参りでき、これでまた一年元気に過ごせることでしょう。

アウシュビッツの遺産

理事長　山下陽一

アウシュビッツ

先月（二〇一六年九月）末ポーランドのアウシュビッツを訪ねました。

ポーランドの南に位置するクラクフは中世の雰囲気が漂う小都市で、日本の京都市に相当するような、古い建築物が残っている比較的狭い静かな街でした。

アウシュビッツはクラクフ中央駅のバスセンターから北西にバスで約一時間半のところ。バスを降りて左手にチケット売り場があり、入場にはちょうど空港の保安検査と同じような武装した警察官が立ち会うチェックを受けます。そして不気味な四メートル程度の間隔で二重に張られた有刺鉄線に沿って歩いていくとアウシュビッツ強制収容所のゲートに達します。

「労働は自由をもたらす」と標されたゲートをくぐります。このゲート、実はゲートの向こう側は、「人間である条件」ともいうべき、日常を生きるという感覚と善悪を問う「良心」の枠組みを徹底的に剥奪した、おぞましい世界が待っていたのです。

テキストと真実

ヒトラー政権による、いわゆる第三帝国は一九三三年からその崩壊する一九四五年まで一二年間のことで、アウシュビッツの惨劇は戦争が激しくなり、その終末までのほぼ五年間に起きたことでした。

ドイツ民族の純粋な血統を保つというナショナリズムがユダヤ人や少数民族・ロマ（ジプシー）などの完全な絶滅・排除のため、強制収容所や絶滅収容所がドイツ国内外に多数建設されました。

私はアウシュビッツで起きた様々なことを手記や写真集などのテキストを介してその惨状を推測していましたが、実際にその場に立ってみると戦慄を覚えることばかりでした。収容所を見学するにあたって「注意書き」があり、その中には『一四歳以下の子どもたちにはお勧めできない』としてあるのです。私たちが見るテキストの写真は、局面のみが切り取られているものでそこから推測するのみですが、実際にその場に立てば高圧電流が流れている二重の有刺鉄線の間を親子が移動させられている光景にも、その狭さに恐怖を感じさせられるわけです。裸体にされた人たちがガス室に向かってせかされるその距離感、処刑場である「死の壁」が生活する棟と棟の間に挟まれてあり、処刑場に面する窓は板で覆われている様子など、静止画ではない、虐殺される人たちの死への恐怖感が迫ってくるのです。

アウシュビッツと少し離れたところにビルケナウ収容所が建設されています。鉄道線路の突き当りに三角屋根に丸い収容ゲートがある写真をよく目にします。アウシュビッツから北へ三キロということですから、無料のシャトルバスはあったのですが、歩いて行くことにしました。その途中、ビルケナウ見学の大型バスの駐車場の角を日本語のプレートをフロントに張り付けたバスが通り過ぎました。なんと「ビックリポーランド八日間の旅」としてありました。施設内の案内係の説明は声を押し殺しての説明なのに、日本人観光客のこのノリはちょっといただけない。

この収容所の面積は私たちの感覚からすると、おおざっぱですが京都御苑を東西方向に二倍にした広さで、その広大な敷地を周囲約十二キロの有刺鉄線を張り巡らせて囲んでいる状態といったところでしょうか。測量されて規則正しく整然と収容棟が立っていました。収容棟の多くとガス室、死体焼却場は破壊されていました。

「いのち」に価値を付ける

強制収容所の人たちもドイツ軍親衛隊（SS）・ゲシュタポ（国家秘密警察）も戦時下の**「人としての立脚点」**において大きく欠落したところがあります。

加害者は人間としての**「良心」**が欠落し、虐殺された人たちは**「羞恥心」**が剥ぎ取られました。

ドイツ人の血筋を純粋に保つために、それ以外の人たち、特にユダヤ人約一〇〇万人、ポーランド人七万五千人、ロマ二万一千人など合わせて約一一〇万人がアウシュビッツでのホロコーストの犠牲者数とされています。

このホロコーストと連動しているのですが、障がいのある人たちも同時期に合法的に殺害されました。**「ナチスドイツと障害者「安楽死」計画」**ヒューギャラファー著（現代書館）によると、**「T4計画」**により、様々な障がいを持つ大人や子どもたちが殺害されているのです。これに関わったのはSSやゲシュタポではありません。医師が合法的に行っていたのです。しかも、ヒトラーの侍医であった、カール・ブラントは**「私は安楽死に合意した…死は救いでもある…殺人は意図しなかった」**と確信的にニュルンベルク裁判で述べているのです。

相模原殺傷事件はその全容がまだ不明ですが、加害者には生きる価値のある「いのち」とそうでない「いのち」が存在していて、無抵抗な障がいのある人たちを躊躇なく惨殺しました。

アウシュビッツを負の遺産とする私たちは秩序と平和を確かなものとしていたはずの今において、何を確実なものとしなければならないのか、静かに且つ深く思いを巡らせなければなりません。

（二〇一六・一〇・一五）

『共に生きる』

寮長　太田正則

豊かさと貧しさ

今年七月、とても悲しい事件が起きました。それは、元施設職員として彼らにかかわっていた加害者が、私たちが成長とともにその時代時代に置き忘れてしまっている「人としての純粋さや普遍的な価値観」の大切さを思い出させてくれる彼らのすばらしさに気付かず、その存在を否定する言動を行ったことです。物が豊かにあふれるこの社会において、心が豊かに育つことなく、どんどん貧しくなっているのかもしれません。今回の出来事は決して一つのことがきっかけで起きた事件ではなく、多くの、いろいろな出来事が複雑に絡み合って起きた事件だと思います。あらゆる角度(視点)からの検証を望みます。また、絡み合っている物事の考察を望みます。そして、そこから見えてくる日本社会の課題をみんなで考え、排除する社会から共生する社会にするための方法を見つけられたらと思います。犠牲になられた十九名の利用者さんのご冥福と、負傷された二十四名の方の一日も早い回復をお祈りするとともに、心に大きな傷を負われた大変多くの皆様に心からお見舞い申し上げます。

今年も異常？

七月・八月と連日で三〇度を超える日が続き、雨が降った日は七月のわずか二日間のみ。昨年植えたおちほ坂の土手の紫陽花が六月にとてもきれいに咲いていたのに、八月中旬には花だけでなく葉っぱもほとんどすべてが茶色く枯れてしまうほどでした。また、平成十二年の施設建て替え工事の影響で機能しなくなってしまったグランドの暗渠排水跡の上の芝や雑草がものの見事に枯れグランドに三本の枯れ草ラインが現れました。入職当初、降雨後や降雪後にいち早く地面が乾いたり雪が融けて確認できていたラインでしたが、平成十二年以降その姿を確認することはできませんでした。そして入職以来初めて、雨が降らないことによる枯れ草ラインの出現に出会い、驚きと感動?を覚えました。しかし、九月に入ると今度は一転して台風の上陸が相次ぎ、全国各地に大きな被害がもたらされました。この災害でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された多くの皆様にお見舞い申し上げます。

さて、そんな中、幸い落穂寮では大きな被害は出ておりませんし、茶色に染まった紫陽花にも緑色の葉が芽を出しはじめ、土の中でしっかりと生きていた植物の生命力の強さに感心し、来年の楽しみを与えてくれたことに感謝しています。ただ、利用者さんが毎日口にする食材が高騰し、献立を考える管理栄養士が頭を抱え、食材費が予算を圧迫する状況に私も頭を抱える今日この頃です。

障がい者差別解消法

障がい者差別解消法が平成二十八年四月一日から施行されました。この法律は、「全ての国民が、障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進すること」を目的として定められたものです。滋賀県においてもこの法律に基づいて条例の制定が進められているところです。ただ、なぜ「障がい者」だけを対象とした法律なのかが、知識不足の私には理解できません。現在の日本社会は障がい者だけが生き難さを感じているのではありません。LGBT・貧困世帯や児童・高齢者・妊婦・シングルマザーやファーザーなどなど。やはり特別視されているのかなと思ってしまいます。否定的な言い方ではなく、そのまま『共生社会創成法』のように肯定的な表現で全ての人を対象としたものでいいと思うのです。冒頭で触れた事件についての報道を見聞きして感じることは、障がい者だから頑張って生きているのではないし、障がい者だけが頑張って生きているのでもありません。みんなそれぞれ自分なりに頑張って生きているのです。だからこそ、みんなが尊重されるべきなのだと思うのです。誰もが生きやすい社会を作るためには、一人一人がそのことを意識し、自覚し、責任を持たなければならないと思います。

やはり、最後には糸賀先生の言葉にたどり着くのです。

『自覚者が責任者』

身の回りに起きる出来事のひとつには、自分にも責任がある。

（二〇一六・九・二十七）

第47回 落穂寮 レクリエーション大会

高く晴れ渡った空のもと、またとないレクリエーション大会日和に、今年も利用者55名と来賓・招待者・ご家族様とたくさんのお客様を迎え、第47回落穂寮レクリエーション大会を十月十六日に開催することができました。

今年は天候に恵まれた為、行事委員を中心に、全職員と利用者さんで応援うちわの作成等をするなど、当日の天気を気にすることなく準備に取り組むことができました。

利用者さんの毎日の取り組みへのがんばりに、お天気も答えてくれたのだと思います。

起床後に万国旗で飾られたグランドを見た利用者さんは、皆さんそれぞれに興奮を隠しきれない様子で朝食を食べ終わり、歯磨きを済ませて着替えをすると、ご家族様が来寮され始めたのをきっかけに、みなさんもう大興奮！

太田寮長のあいさつの後、松山stによる開会宣言で、レクリエーション大会開催です。

徒競走

みんなでラジオ体操を終えた後、午前の競技は、毎年恒例の全員参加の徒競走です。

利用者さんそれぞれが、15～70mを無事完走！

利用者さん全員がゴールした後は、ご参加頂きましたお客様にも徒競走への参加をお願いしましたところ、多くの子供さんやも杉山寮からのお客様がご参加下さいました。

自分が完走する楽しみだけでなく、他の方の応援をする楽しみも満喫されました。

そしてもちろん、恒例の新人紹介徒走では、昨年天気の関係で走ることができなかったので、昨年・今年合わせて7名の職員が出走し、年齢に関係なく全員がフレッシュな走りを披露してくれました。

美味しいお弁当をご家族様や職員と食べた後は、赤チーム・白チームに分かれて、〈借り物競争〉、〈鬼玉入れ〉、〈綱引き〉で豪華景品をかけての紅白対抗戦！

赤チームリーダーは智秋st、白チームリーダーは松山st。さぁどちらが勝つかな？

借り物競争

たくさんあるカードの中から1枚を選び、そこに書かれた品物を探し出しゴールを目指しますが、参加頂いていた方からサングラスを借りる方、そして特別カードに描かれた太田寮長と一緒にゴールする方とみなさん借り物を無事手にしてゴールされていました！

レース途中にはスマイル寮長カードと鬼の寮長カードが同時に出てしまうハプニングもあり、5人仲良く手を繋いでゴール！しかし獲得点数はというと…スマイルカードはプラス10点、鬼カードはマイナス10点と、仲良くゴールしたものの、明暗は分かれてしまいました。

太田寮長大人気でした

鬼玉入れ

鬼玉入れは、タイムレース。

鬼にぶつけて籠に玉を入れる方、鬼を追い掛け回して籠に玉を入れる方と、思い思いに楽しんでおられました。

綱引き

1回戦は、スタートダッシュで綱を手繰り寄せた白組が勝利。

2回戦は、1回戦で負けてしまい後のなくなった赤組が勝利。

いよいよ最後の対決3回戦。

ここで強力な助っ人登場。白組には元アメフト部の澤田stが、赤組には筋肉隆々の中西stが加わり、誰にもどちらが勝利するのかわかりません。

熱気が渦巻くグランドに、ピストルの合図が切られると、1回戦同様白組が綱を引き寄せ、勝負が決したかと思いきや、猛然と赤組が綱を手繰り返し逆転勝利！

各対戦結果は…。

借り物競争	白組　勝利
鬼玉入れ	白組　勝利
綱引き	赤組　勝利

本年度のレクリエーション大会は、得点差で白組の勝利でした！

ダンス

職員による一日頑張った利用者さんへのプレゼント。

もちろん、本日集まって頂いた皆さんと一緒に楽しく踊りました。

一日頑張った利用者の皆さん、熱い声援やご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。

皆さんと素敵な思い出を積み重ねることができました。

ぜひ来年もご参加お待ちしております！

納涼祭

さてさて、お地蔵様にお願いした後は、甚平やお気に入りのTシャツに着替えて多目的ホールへ大移動。目の前には屋台がズラリ。大好きな焼きそば、ポテトフライ、フランクフルト等のにおいが漂い皆さんヨダレがダラリ。いつもは食事に制限がかかってしまう利用者さんでも、今日はお祭りなんだから沢山食べてもいいよね！と自分のお皿が空になると、『もう一回ください！』と目を輝かせては屋台での食事を満喫されていました。食後には皆でグラウンドへ。中心には大きな櫓（やぐら）が堂々と建てられ、滋賀県民お馴染みの江州音頭を全員でグルグル回りながら踊ります。職員を真似て踊ったり手拍子したり、音楽に合わせて体を揺らしたり、それぞれの表現方法で盆踊りを楽しまれ、櫓（やぐら）の周りには笑顔がたくさん溢れていました。踊り疲れた後には毎年恒例の花火大会！手持ち花火が苦手な利用者Yさんも線香花火なら大丈夫！最後には少し緊張気味な職員が打ち上げ花火に点火すると、『ドドーン!!』と大きな音と共に綺麗な花火が夜空に咲き散り、それに負けない程の大きな拍手が巻き起こりました。お腹いっぱい胸いっぱいで今年の納涼祭も楽しんでもらえたのではないかと思います。

女子棟 飯盒炊爨

今年も待ちに待った夏の恒例行事、飯盒炊爨（はんごうすいさん）が行われました。今年は、昨年の様に台風の影響はなかったのですが、週間天気予報では雨で、当日早朝より大雨が降り、職員の気分も雨模様でのスタートとなりました。今年は、竜王町にある妹背の里（雪野山史跡広場）で行いました。小雨の中、天気なんかお構いなしの様子の皆さんの気持ちに応え、いざ出発！

公園に到着すると、初めて訪れる所なので皆さんワクワクしてきました。今年は、バンガローを一棟借りてのんびりくつろげる場所も用意しました。

お昼ご飯まで広場内にある池や芝生広場で散策する人や、ベンチに座ってのんびりお喋りを楽しむ人。まだかまだかと職員が火を起こしたり、調理しているのを監督してくれている人など、それぞれ楽しみにして待ちました。

昨年は焼きそばが人気で足りなかったので今年は量を増やしてお待ちかねの昼食タイム。

お腹いっぱい食べました。みんなの気持ち届いたのか天気も悪化することなく楽しい飯盒炊さんとなりました。

『また来年まで元気に過ごせるね』と無事に一日終わりました。

アヒルにもご飯あげましょう

おいしいで～す。

さぁ～！準備しよかぁ～！

七夕フェスティバル

夏の風物詩七夕。今年も落穂寮では七夕フェスティバルを開催しました！

今年は新人職員3人による劇をお披露目しました！

劇のテーマは国民的アニメサザエさん！出演者全員浴衣を着て七夕っぽく演出しました。

多忙なスケジュールの合間を縫って新人職員が集まり小道具や装備品などの制作、ダンスの練習などをしていました。挫けそうになる時もありましたが先輩からの応援もあり、「みんなが楽しめる七夕フェスティバルを…！」という気持ちが強くなり、一生懸命取り組むことが出来ました。

劇のストーリーは、ダンスを踊って疲れたカツオがサザエさんを呼ぶと…サザエさんが2人！？というところから始まり、本物のサザエさんはどちらなのかを見極めるストーリー。前田stの波平は衝撃的だったのか多目的学習室は笑いに包まれました。最後は利用者さんと先輩職員全員を巻き込んで恋するフォーチュンクッキーを踊り催し物は幕を下ろしました。大はしゃぎされる利用者さん、笑顔で楽しまれている利用者さんを見て、大きな仕事をやり遂げた達成感がありました。とても楽しい時間を過ごすことが出来ました！

男子棟飯盒炊爨

暑さも落ち着いた九月十六日に、昨年雨で行くことの出来なかった野洲のマイアミ浜へ行ってきました。先発隊の職員が沢山お肉を買い込んで現地でバーベキュー‼

少し遅れて到着の利用者の方々は焼き上がるまでびわ湖畔ということで近くまで寄ってみたり、砂浜で砂を触って遊んでみたりと待っている時間も楽しんでいました。さぁ！焼き上がり、まだ何も入っていないお皿とお箸を手に、今か今かと自分のお皿にお肉が入るのを待つ利用者さんの目は輝いていました。次々とお肉・野菜・ウィンナーがお皿へ入るもすぐお腹の中へ。おかわりくださーいと心の声が…。再びお皿に入ると満面の笑みが、たくさん召し上がり、お腹も大満足。頑張って焼いてくれた職員に向けて『美味しかったです！ごちそうさまでした』。来年もおいしいものがたくさん食べられるように日々の歩行を頑張っていきましょう！

この日、通所生活介護のメンバーは、寮でお楽しみ会を行い、負けじとお好み焼き、焼きソバ、焼肉といつもは食べることの出来ないメニューをおいしくいただきました。とってもおいしかったです。

総合教育センター交流会

去る十月四日に、ここ数年恒例になっている滋賀県総合教育センターから特別支援学校の新規採用教員の14名の方々が〝利用者さんとの関わりから学ぶ〟との事で丸一日研修に来られました。

研修と言っても普段の生活リズムを崩すことが出来ない利用者さんとの関わりになるので、常日頃の活動を見ていただきます。その中でもさすがは特別支援学校の先生方です。利用者さんの心を掴むのが上手く、しっかりとポイントを押さえて支援をして下さるので、利用者さんも安心して身を任せておられたように感じます。

教育と福祉、分野は違いますが、一人の方の人生を「線」としてどう考え支援して行けるのか問題を共有できたことはとても良い機会になったと思います。

お互いにこれからも「明日の笑顔につながる支援」をがんばって行きましょう！

草刈りボランティア★

九月下旬に、日頃地域の行事等でお世話になっている石部南まちづくり協議会の4名の方が寮内の草刈りボランティアに来てくださいました。

自然が多いのが落穂寮の魅力ではあるのですが、梅雨と夏の暑さでニョキニョキとどんどん伸びる為、最近では草刈りが追い付かず草原状態になっていました。

朝早くから草刈り機で一気に刈り上げてくださったので昼前にはとってもきれいな状態になっていました。

暑い中本当にありがとうございました。

ご協力ありがとうございます

社会福祉法人椎の木会及び落穂寮の運営にご協力いただいた方に、この場を借りて御礼申し上げます。

今後も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

平成二十八年九月末現在

〈寄付金〉

シガ技研

〈物品の寄付〉

原田隆和

宇川新蔵

〈寄贈〉

河本文教福祉振興会

（敬称略）

ありがとうございました。

泉

誰もが人生において経験するのに、誰にもその瞬間を語れない事が2つあります。

自分が生まれた時と死ぬ時のことです。前者は記憶にないから、後者は経験した瞬間に語ることが不可能になるからです。しかし、自ら語ることはできなくても、人生でそれらを間近で見ることで、考えたり想像したりする機会を得ることは出来ます。ここでは「生まれた時」について考えてみたいと思います。

人が生まれる瞬間、その姿から私たちが感じられるのは「生きたい」というむき出しの強い意志です。それはあまりにも純粋で、一切の不純のない、そして、全ての生命をもつものが最初に発するメッセージだと思います。それを感じ取るからこそ、我々は、放っておけば消え失せてしまいそうな命を必死で守ろうとするのでしょう。「生きる」ということは、この「生きたい」という純粋な意志の延長線上にあるものです。そして純粋であるが故に完全な肯定を求め、一切の否定を拒むのです。ですから、「生きる価値」は生きることそのものにあると私は考えます。しかし、その純粋さは知識や経験と引き換えに徐々に薄れてしまい、私たちは生きること自体に意味や価値を求めてしまうようになるのかもしれません。

神奈川での悲しい事件の一報に触れてこのようなことを考えました。犠牲になった方のご冥福をお祈りします。

木言（こと）

ここに種が落ちたのはたまたま
芽が出て
食べられなかったのは
鹿のきまぐれ
嵐で倒れなかったのは
ただの幸運
偶然が重なって
今ここに立っている